

大仏師定覚

三宅久雄

はじめに

建仁三年（一一〇三）造立の東大寺南大門仁王像は、昭和六十三年から平成五年にかけて解体修理が行われ、その際、発見された銘記や納入経の奥書から注目すべきいくつかの事柄が判明した。そのうちのひとつに、大仏師として従来知られていた運慶、快慶のほかに、推測はされていたが、湛慶と定覚が起用されたことが確かめられたことがある。加えて大方の予想を裏切り、阿形像は運慶と快慶、吽形像は定覚と湛慶が分担したことも明らかになり、新たな問題をなげかけた。

当時、運慶の長男湛慶は三十歳、この慶派の後継ぎと組んで吽形像の造像に当たったのが定覚である。周知のとおり、定覚という仏師は大仏殿西脇侍像、四天王像復興において康慶、運慶、快慶とともに活躍した慶派の四人の大仏師のうちの一人である。慶派の中では重要な位置を占めているように思えるが、彼の現存作例は南大門仁王像のみであり、しかもこの仁王像からは定覚個人の作風を知ることが、まずできない。出自もはっきりとせず、知名度の高いわりには謎に包まれた仏師である。ここで南大門仁王像の銘文を契機として、この定覚についてあらためて考えてみたい。

以下、年代を追って問題点を見ていくことにするが、その前にまず、すでによく知られていることではあるが、定覚の事蹟を簡単に一覧しておく。

建久五年（一一九四）十二月 東大寺南中門二天のうち西方持国天像を造り始める（東大寺統要録造仏篇）。

建久六年（一一九五）三月 大仏殿供養に際し快慶とともに法橋叙位。快慶は運慶の息子に賞を讓る（東大寺縁起絵詞）。

建久七年（一一九六）六月 東大寺大仏殿脇侍如意輪観音像を快慶と造り始める（東大寺統要録造仏篇）。

同 十二月 東大寺大仏殿四天王像のうち多聞天像を造り始める（東大寺統要録造仏篇）。

建仁三年（一一〇三）七月十月 東大寺南大門仁王吽形像を湛慶と造る（像内納入宝篋印陀羅尼經奥書、東大寺別当次第）。

同 十一月三十日 東大寺総供養において賞を覚円に讓り法橋とする（東大寺縁起絵詞）。

東大寺南中門二天像

東大寺南中門二天像の造立にあたり、定覚は西方持国天の大仏師となり小仏

師十三人を率いている。一方、東方多聞天は大仏師快慶、小仏師は十四人であった(史料1)。

定覚の配下に小仏師として従った十三人と、南大門仁王像で定覚に従った小仏師六人には共通性は見られない。というより、南中門二天像で定覚に従った小仏師は、雲慶が著名な運慶に当たるかどうかは別として、良尊が東大寺僧形八幡神像の小仏師として名が見える人物と同一人かもしれないが、他は知られていない仏師ばかりである。これは快慶に従った小仏師がその他の快慶作品の銘記中に登場するものが何人か見られるのとは対照的である。

さらに、南中門二天像制作にあたった絵仏師を含む全体を見ておこう。ここでの問題は、まず「東大寺統要録」の記述中、木仏師と絵仏師に同名の仏師がいるのをどう考えるかである(ここでは普通を除外しておく)。また寺家絵仏師に見える定慶を著名な木仏師と同一人物とみなしてよいかどうかである。つまり木仏師が時には絵仏師として参加したり、彫刻が終わった後に木仏師が絵仏師としての仕事にまわることがあるか否かということであるが、この南中門絵仏師中に定慶などのような木仏師も含まれるとする考えは早くからあった。

南中門二天像についてみると絵仏師は、単に絵仏師と呼ばれるものと寺家絵仏師の二つの区別がある。慶仁は東方天小仏師と、寺家絵仏師のうちの小仏師として名が見えるが、これは別人かと考えられる。木仏師のほうの慶仁は南大門仁王形像の湛慶配下の小仏師として見える慶仁と同一人物であろう。それに対して良尊は、西方天小仏師と東方天絵仏師中の小仏師との双方に名が見える。これは同一人物の可能性もあるのではないだろうか。

西方天絵仏師の定円、定勝という名は、後述するように南大門仁王形像の定覚配下の小仏師中にも見える。同名異人と見ることもでき、絵仏師と木仏師の関係はよくわかっていないので、ここでは異同の判断は保留したい。

ところで、東大寺の木彫巨像群復興の冒頭を飾る南中門二天像造立に運慶は

さておき、康慶の名が見えない。建久六年三月の大仏殿供養において法眼康慶の譲りで運慶が法眼に叙せられているところから(東大寺統要録供養篇)、少なくとも康慶はこの南中門二天像の造像に関与したと推測されている。これは早くに毛利久氏が指摘し、後に田邊三郎助氏が「当時無冠の定覚・快慶へ直接まかされたとは考えにくい」として康慶の関与を積極的に認めており、今日ではこの考えが大勢を占めているようである。

確かに、慶派の頭領としての康慶の存在を重く見ると、いかに東大寺大勧進であった俊乗房重源といえども直接的に快慶と定覚を起用できたかには問題が残る。このことは建久六年の大仏殿供養において康慶に対する勸賞を、二天造立によるものとする考えにも至る。実際には東大寺の木彫巨像群の復興の最初にこの二天が造立されたのであるが、この後に続いた大仏殿両脇侍像や四天王像は、南中門二天像に先立つ建久五年六月以前に源頼朝が御家人に造立事業を分担していた。すると、大仏殿と南中門の木彫巨像はひとまとまりのものとして計画が立てられていたとも考えられる。その中では南中門造像が格落ちの仕事であることから、康慶が無位の快慶と定覚に割り振った可能性が出てくる。

しかし、そうではないであろう。源頼朝が御家人に分担を命じ、かつ康慶が参加した大仏殿諸像は別として、南中門二天像は重源が直接、快慶、定覚の二人に依頼したのである。定覚に関しては不明であるが、周知のとおり快慶は早く建久三年(一一九二)の三宝院弥勒菩薩像制作時には安阿弥陀仏を称しており、重源の浄土教の信奉者であったことはよく知られている。これ以前に重源との繋がりがあったことは確かであろう。南中門二天像以後も、例えば建仁三年(一一〇三)東大寺俊乗堂阿弥陀如来像など小規模のものだけでなく、重新大仏寺や兵庫浄土寺など重源がはじめた別所の丈六阿弥陀三尊像など、これらはやはり重源と快慶との関係の中で快慶に依頼された仕事であったと考えべきであろう。

上記を総合して勘案すると、南中門二天像は大仏殿内諸像とは別に重源の意向によって担当仏師が決められたと考える方がよいと思われる。

小仏師雲慶

次いで問題となるのは、西方持国天像の大仏師定覚に従う小仏師の筆頭に「雲慶」と記されていることである。この仏師を康慶の子息運慶と同一人物とみなすか否かについては説がわかれるところであるが、どちらかと言えば、運慶と考える研究者が多い。「仕事の相性や供養時の叙位を考慮したうえで、康慶のはからい」とか、「こうした巨像をわずか二、三か月で造るような特殊な造像の経験の後継者運慶に積ませるために、敢えて一門の有力仏師の下で実際の作業に従事させるという配慮」というような解釈がおこなわれている。また後に述べるように定覚を運慶の弟とする伝えがあるが、これを認める考えに立つ場合、弟を補佐したということになる。こうした解釈にはいずれも無理があり、いかに定覚が古参の有力仏師であったとしても、慶派の後継ぎたるものがこれに小仏師として従うとは思えないし、また弟の下に付くということも常識的ではない。

かつて林屋辰三郎氏は「運慶が若し建久五年十二月以前に既に南都に於いて大仏師職に補せられていたならば、この小仏師雲慶を別人と断ずるほかはない」と述べた。この「南都に於いて大仏師職」という言葉の使い方はいささか曖昧の感があり、かつて大仏師に二類ありとされた「仏像製作に即しての大仏師」と、「一寺院の組織の一つとしての大仏師職」のいづれかということになる。ただ、林屋氏は文治二年（一一八六）の静岡願成院の造像において運慶の肩書に大仏師が記されていないことから「未だ大仏師にも法橋にもなっていない」としているところからすると、大仏師という呼称を広義にとらえているよ

うにも思われる。この論が発表された当時、文治五年（一一八九）の神奈川淨楽寺阿弥陀三尊像などの造像が知られていなかったが、これら諸像に納入されていた銘札に「大仏師興福寺内相応院勾当運慶小仏師十人」とあることが判明しているので、林屋氏の論法でいくと南中門の小仏師雲慶は運慶ではないという結論になるであろう。

運慶がいつから大仏師と称したかという点、さらに遡る。近年発見された興福寺西金堂釈迦如来像の復興造像に関わる文書において、文治二年（一一八六）正月、再興像を禅定院から西金堂に搬入した箇所において「大仏師運慶」と記されている。これが運慶が大仏師と称した初見である。かつて松島健氏は興福寺釈迦如来像頭部を運慶の作と推定し、文治五年の浄楽寺像の銘札において運慶の肩書に大仏師を用い始めたのは、この頃、運慶が興福寺西金堂大仏師となったからではないかと推測した。新史料の発見により運慶の西金堂大仏師就任は遅くとも文治元年にまで遡ることが判明した。文治二年五月の願成就院銘札においては「大仏師」と記していないが、一旦大仏師となった仏師が必ずしもこの肩書を用いるとは限らないので、不都合はない。

田中嗣人氏は寺院との結びつきを意味する大仏師、造像担当者の主体もしくは統率者としての大仏師、仏所の大仏師などがあるとした上で、「大仏師の意味するところは甚だ多岐でその実態はなかなか把握しにくい」と指摘しているが、個別具体的にはまさにそのとおりである。田中氏の言う仏所の大仏師とは、鎌倉時代以降によく見られる仏所名を付した大仏師のことであるが、そもそも平安時代に一般的となった大仏師、小仏師とは本来的には仏所の大仏師、小仏師ということでも、もっとも基本的な用法であろう。仏師の格付けとして、個別の造像事情に左右されない資格あるいは肩書であると考えられる。

一寺院の大仏師職という場合は別として、ここで考慮すべきは個別の造像において決まる大仏師についてである。ある造像において大仏師を称した仏師が、

その後の造像において小仏師と称することがあるかという問題である。つまり大仏師、小仏師は造像事業別に決められる相対的な地位であるのかどうかである。一般的には小規模な造像においては小仏師として請け負ったとしても、大規模な造像ではさらに上位の大仏師の下で小仏師として参加するようなことが考えられる。こうしたことについて太田博太郎氏は、建築工匠の場合、工事によって大工と権大工の位置が逆になることもあると指摘し、「大仏師の場合もときに上下関係が逆になるようなことも十分ありうる」と述べている。しかしながら、仏師の場合、果たして一旦大仏師を称した仏師が、その後、小仏師として参加することがあるであろうか。史料的な偶然性にもよろうが、そのような希な例が東大寺南中門造像であり、もう一つ、建仁元年（一一二〇）に快慶が製作した東大寺僧形八幡神像がある。後者の像内銘記によると、小仏師は二十八名の多数に及び、その中に「運慶」の名が見える。これも別人とする考えもあるが、やはり等身大の像に不自然に多い小仏師の人数であるところから、この像は快慶自身が施主となるといふ特殊な事情のもとに造立されていることを考慮すると、この多数の小仏師は結縁者として名が記されたものと解するのが妥当である。¹⁴

以上、定覚配下の小仏師雲慶は運慶とは別人であると考えた方がよいであろう。『東大寺統要録』の中では、他の箇所はすべて「運慶」という表記を用いていることにも注意しておきたい。同一工房内で同名仏師は考えがたいとするむきもあるが、一般人名もそうであるが、音通を除外しても同名異人は少なからず存在すると思われる。¹⁵

定覚の法橋叙位

建久六年の大仏殿供養時に定覚は法橋に叙される。この時快慶は賞を運慶の

子息に譲っている（東大寺縁起絵詞）。太田博太郎氏は「無位の快慶がその賞を譲ったのは、たとえ重源のお気に入りとはいえ、譲らざるをえない状態にいかれていたのであろう。そこに快慶の仏師間における位置が、おのずと明らかになるように思われる」と指摘している。これは快慶が慶派の中では傍系であったことに注目しようとしたものであるが、これを定覚の側に着目すると、「快慶の辞退が、康慶の血縁ではなく弟子筋であったためとすれば、定覚がその血縁につながるのと所伝も、あながちに否定できない」という見方に至る。これは近世の仏師系図『本朝大仏師正統系図』（『墨水遺稿』所収ほか）に康慶の二男、つまり運慶の弟と伝えていることを念頭においている。松島健氏は年齢的には康慶の弟のほうが可能性があるとするが、¹⁶ともかく血縁関係があつたという伝えに肯定的な見方を示す研究者もいる。定覚とさほど年齢に開きがあるようにも思えず、快慶だけが法橋位を運慶の子息に譲ったのは、やはり彼の出自によるものと考えると、定覚が康慶の血筋につながっていた可能性は高いのではないだろうか。

次いで建久七年（一一九六）六月から東大寺大仏殿の木彫巨像群の製作がはじまる。定覚はまず大仏脇侍の如意輪観音像を快慶と組んで担当し（史料2）、引き続き大仏殿四天王像のうち北方多聞天像を担当している（史料3）。なお、この時、運慶が東方持国天、康慶が南方増長天を受け持ったことから、親子の立場の交替の可能性を考えるむきもあるが、「鈔本東大寺要録」によると、東方天が康慶、南方天が運慶、いずれの史料も西方天は快慶、北方天は定覚としている。大仏脇侍の場合、いずれの記録も法橋位にあつた定覚を快慶より前に記しているが、四天王像造立では通常では上位となる西方広目天像を快慶が担当している。¹⁹

南大門仁王像の大仏師

解体修理は吽形像から阿形像へと進められていったが、発見された銘文について逐次報告し、解釈を付したのは文化庁の担当官であった松島健氏であった。²⁰氏は阿形像金剛杵墨書（史料4）について「この銘記を素直に解釈すれば」として、阿形像は運慶を大仏師として、快慶と小仏師十三人、番匠十人によって造られ、吽形像は宝篋印陀羅尼經の奥書（史料5）によって大仏師定覚と湛慶、小仏師十二人としたうえで、「東大寺別当次第」に仁王像の小仏師は十六人と記していることと人数に差がありすぎることから、阿形像金剛杵墨書が「単に阿形像にのみ関わってのものかどうか尚検討の余地がある」と指摘している。

この「東大寺別当次第」との小仏師の人数の違いを解決しようとしたのが田邊三郎助氏である。吽形像納入の宝篋印陀羅尼經奥書に見える大仏師二人と小仏師十二人、彼らを指揮したのが阿形像金剛杵墨書に見える運慶と快慶であるとの考えを示した。²¹これに対して麻木脩平氏は記録に見える慶派による巨像製作に要した小仏師の人数に比べてあまりに少なすぎるとし、やはり吽形像納入宝篋印陀羅尼經に見える仏師は吽形像の製作に、阿形像金剛杵墨書に見える仏師は阿形像の製作に当たったと考えるべきであるとした。また阿形像墨書が阿吽両像に及ぶものとする、吽形像納入経奥書に見える大仏師定覚と湛慶が見えないのは致命的な問題点とした。²²

南大門仁王像の解体修理は平成五年に完成したが、この修理における新知見をふまえて関係者によってこの修理事業を総括したのが「仁王像大修理」である。この中で、仏師の構成について、西川新次氏は阿形像、吽形像の各墨書はそれぞれの像に関するものとする立場をとり、一方、西川杏太郎氏は田邊氏と同様、吽形像の墨書を阿吽両像にかかる仏師を記したものとする考えに立った。²³

これは麻木氏による反論後のものであり、また田邊氏は同じく麻木氏の反論後の論考において「大仏殿内の巨象制作において経験を積んだ運慶らが、この仁王像において、小仏師を精選し、十人もの番匠を動員していることは、意味のあることに思える」と述べ、麻木氏の小仏師の数が少なすぎるという点に答えたいものと言えよう。

平成十六年に出版された「日本彫刻史基礎資料集 鎌倉時代 造像銘記篇二」はこの本の性格上、この時点での学界の大勢をふまえたものと思われる。早くに麻木氏が提示された疑問点を認め、各像の墨書に見える小仏師はそれぞれを担当した仏師とする見方をとっている。²⁴

以上、仏師の解釈についての諸説を概観してきた。筆者の見方も簡単に述べた機会があったが、ここで再度要点を述べておくことにする。仏師や番匠の人数が東大寺の他の巨像制作との比較においてどうかということは、確かに南大門仁王像の場合は少ないという感は強いが、決定的な理由とはならない。とくに「東大寺別当次第」に小仏師十六人とあることを考慮すると人数はやはり決定的な理由とはならない。やはり、阿形像金剛杵墨書中に大仏師として定覚と湛慶の名前が出てこないことがきわめて不可解である。大仏師であった二人を「少仏師十三人」の中に数えたということもあり得ないであろう。もう一つの理由は、阿形像金剛杵墨書における行事の記し方である。仁王造像に従事した行事は、阿形像納入の宝篋印陀羅尼經の奥書（史料6）に「已上十人佛所行事」として十人の名が列挙してある。これと同じ十人が吽形像の宝篋印陀羅尼經奥書にも、仏師の記述の次行から二列五段に記されている。つまり行事は阿吽合計で十人ということになる。ところが阿形像金剛杵墨書には行事は五人しか記されていない。その後ろにまだ続けて書く余地は残っている。従って、これは阿形像担当の行事のみを記したのと考えるべきなのである。そうすると、仏師も同じように阿形像担当者のみを列記したと考えるべきである。

松島健氏は「仁王像を請け負った折になお、康慶が慶派の主宰者であったとすれば、吽形は本来運慶の分担であったように思われ、康慶没後に運慶がその後を襲ったため、吽形造立に湛慶を起用することになったのではないかと想像される」としている。康慶が存命中であったとして、松島氏は具体的に南大門仁王像の分担をどのように考えていたのかは述べていないが、康慶はおそらく上位である阿形像を受け持ち、吽形像を運慶に担当させるつもりであったのであろう。

定覚と小仏師たち

南大門仁王像で定覚配下の小仏師の筆頭の覚円は、建仁三年（一二〇三）十一月の東大寺総供養の勸賞で定覚の賞を譲られて法橋となっており（東大寺縁起絵詞）、定覚の主要な弟子のひとりと思われる。また、その覚円の下に記された定勝、定円、定尊はいずれも名前に定の字が付き、どうやら定覚とは弟子筋にあったらしくみられる。こうしたところから、「慶派とは別派をなしていたように思える」という考えも出てくることになる。定覚を運慶の弟と伝える

「本朝大仏師正統系図」では、定覚に「二男、法橋、奈良一流始」と注記している。東大寺総供養の際に弟子に法橋位を譲った後、定覚は史上から姿を消すが、法橋どまりであった可能性はきわめて高い。しかも南中門二天造像時と小仏師の状況を比べてみると、一派が形成されつつあったように察せられる。おそらく大仏殿諸像の造像を経て形成されていったのではないだろうか。後世、これを「一流始」としていることも合点がいく。同系図では「定覚―運覚―遠江」と系譜が続いている。遠江とは建久八年（一一九七）、運慶一門が東寺講堂像修理に携わった際、阿弥陀像の頭部を解体して舍利等の納入品を発見した「小仏師遠江別当」のことと思われ、当時の小仏師中でも重要な一員であった

ことが察せられる。先の法橋叙位の一件と併せ考えると、近世の伝えとは言え、康慶の二男、すなわち運慶の弟と伝えることも信すべきことのように思われる。なお先の定円と定勝については、南中門西方天の絵仏師中に登場する二人と同一人物とする考えもある。寺家絵仏師ではないこと、西方天の大仏師は定覚であったことを考えると同一人物でもよいかと思われるが、木仏師と絵仏師の關係についてはなお検討の余地を残している。

大仏師湛慶の方でちょうどこの覚円の立場に位置する筆頭小仏師は源慶である。彼は寿永二年（一一八三）運慶が書写した法華経の奥書に結縁者として見える源慶と同一人物であり、また興福寺北円堂諸像制作において中尊弥勒仏像を担当した「上座大仏師源慶」、嘉祿二年（一二二六）奈良如意輪寺蔵王権現像の作者源慶と同一人物と考えてよい。先述のとおり、慶仁は東方天快慶配下の小仏師であった。湛慶は慶派の直系にふさわしい小仏師を配下につけていたようである。

定覚の作風

定覚の作風については、具体的などころは不明とするしかない。太田博太郎氏は南中門二天像の制作に当時無位であった定覚と快慶を抜擢したのは俊乗房重源であったとする。重源は宋の建築様式を採り入れようとしたのと同様に、仏像にも宋風を採り入れようとし、彼ら二人の仏師起用となったが、この後に続く大仏殿の脇侍、四天王像の制作にあたっては大物を短期間で完成させなければならなかったこともあり、源頼朝の推挽によって康慶、運慶を参加させざるを得なかったと考える。なるほど、慶派仏師の木彫像とは別に重複して、宋人石工に石で脇侍と四天王像を造らせていることは、宋風に対する尋常でない執着をあらわしたものであろう。南中門二天像制作の仏師選定に際しては、重

源の強い意志が働いたことは十分に考えられる。

さて快慶は重源の求めに応じて、兵庫浄土寺や三重新大仏寺では宋画を手本として彫像を制作している。また、建仁三年（一一〇三）の奈良文殊院文殊五尊像など、快慶は運慶よりは宋風の撰取には柔軟であったようである。こうしたところから、毛利久氏は鎌倉初期の宋風の強い東大寺中性院弥勒菩薩立像、京都峯定寺釈迦如来立像を快慶の作と推定した。³⁵ この二軀の像は水野敬三郎氏によって快慶作であることが否定されたが、後に水野氏はこれらを定覚の作とする可能性を指摘している。³⁷ この定覚は確実な作品が無いこともあって、重源に抜擢され、快慶との相性も問題がないように思われるところから、宋風を採り入れた仏師のような印象が持たれたことによるものであろう。また松島健氏は重源と南中門二天の宋風撰取を念頭において「快慶の作品に類似しながら、宋風を採り入れて別の個性を示す」作品のうち、東大寺関係の先の中性院弥勒菩薩立像を定覚の作と考えてよいとしている。³⁸

南大門仁王像の銘記はこうした定覚観に影響を与えたのではないかと思う。南大門仁王像の作風については、解体修理前は、大仏師であることがすでに明らかであった運慶と快慶に着目し、吡形像に運慶的作風を、阿形像に快慶的作風を認め、阿吡一組としての統一の中に大仏師四人の中で最上位にあった運慶の統率力を認めつつも、むしろ阿吡の個性の相違に着目する視点が大方であった。解体修理で銘記や奥書が判明した後、阿形は快慶が定覚と小仏師たちを、吡形は運慶が湛慶と小仏師たちを監督して造像したと考える論者は、従来とそれほど見方がかわるところはない。一方、阿形は運慶と快慶が、吡形は定覚と湛慶が、それぞれ担当したとする見方では、従来より一層強く運慶の阿吡両像に対する統率力を意識し、その上で、阿吡の作風の差は、阿形は快慶に、吡形は定覚にまかせたことによるところが大きいと解する結果となった。つまり、阿形像についてはこれまでとかわるところはなく作風によって来たるところ、快慶

の手に帰する。しかし、吡形像についてはこれまでとはニュアンスが違ってくる。定覚の、そして湛慶の働きを重くとらえなければならぬ。

麻木脩平氏が「現在の吡形像を見る限りでは、定覚は、自覚的に運慶とは異質な造形を志した仏師のように見えぬ。おそらく定覚は、運慶が作ったであろう雛形に、快慶よりも忠実に従って造像したのであろう」とされる。西川新次氏が「運慶の意図を汲んで運慶風の吡形像を制作し」と言われたことも同じことを意味しているであろう。

ここで、先に見たような宋風に親近性のある定覚のイメージと、吡形像に見る顕著な運慶的要素とは結びつかないように思えてくる。

慶派における宋風の撰取と言えば、肥後定慶が思い起こされる。定覚のもつ宋風のイメージと南大門吡形像の運慶風とは、肥後定慶の鞍馬寺聖観音菩薩像と東京芸術大学毘沙門天像および石叢寺や横蔵寺の仁王像との関係によく似ているのではないだろうか。

南大門仁王像のうち、阿形像の作風に快慶の存在を重く見るのであれば、吡形像は運慶風と評するにせよ、同じ論法で定覚を認めなければならないのではないだろうか。運慶風が濃厚にあらわれているということかもしれないが、あまり定覚を意識できないのは、快慶と違って、何よりも他に確かな作例がないということが決定的である。吡形像で湛慶と組んだが、銘記の記載形式、年齢、経験からみて定覚が指導的立場にあったであろう。湛慶のその後の作風を見ると、定覚の方がはるかに「運慶風」であったように思える。大仏殿の諸像は別として、定覚の他の作例には果たして宋風の一面があったのであろうか。こうしたことを念頭におきつつ、同時期の無銘の優れた慶派の仏像を検討すべきであったが、問題点の整理にとどまった。今後の課題としたい。

- (1) 快慶作品では、良快と快尊は東大寺僧形八幡神像、奈良文殊院文殊菩薩像、三重新大仏寺阿弥陀如来像頭部、良清と慶寛は東大寺僧形八幡神像、慶仁は南大門吽形像、仁慶は寿永二年(一一八三)の運慶願経中に見える。
- (2) 金森蓮「鎌倉時代の仏師組織に就いて」(『鎌倉彫刻図録』奈良帝室博物館、一九三三年一月)
- (3) 毛利久「仏師快慶論」(吉川弘文館、一九六一年一〇月、同増補版、一九九四年九月) 二四三頁
- (4) 田邊三郎助「日本の美術七八運慶と快慶」(至文堂、一九七二年一月)
- (5) 『吾妻鏡』建久五年六月二十八日条
- (6) 副島弘道「運慶—その人と芸術—」(吉川弘文館、二〇〇〇年九月) 一三八頁
- (7) 根立研介「日本中世の仏師と社会—運慶と慶派・七条仏師を中心に—」第四章慶派仏師工房の組織(塙書房、二〇〇六年五月) 一八七頁
- (8) 林屋辰三郎「仏師運慶について—その伝記に関する文献的考証—」(『仏教芸術』一三、一九五一年九月)
- (9) 谷信一「佛所及佛師考」(『美術研究』三四、一九三四年一〇月)
- (10) 横内裕人「『類聚世要抄』に見える鎌倉期興福寺再建—運慶・陳和卿の新史料—」(『仏教芸術』二九一、二〇〇七年三月)
- (11) 松島健「名宝日本の美術5興福寺」(小学館、一九八一年七月) 一〇四頁
- (12) 田中嗣人「日本古代仏師の研究」(吉川弘文館、一九八三年八月) 二九六〜二九七頁
- (13) 太田博太郎「重源と快慶」(『奈良の寺』17 東大寺南大門と二王) 岩波書店、一九七五年四月)
- (14) 前掲註(3) 毛利久「仏師快慶論」三七〜三八頁
- (15) 仏師ではないが、例えば寿永二年四月十九日大仏頭部の鑄造に従事した小工十一人のうちに「助友」が二名記される(『東大寺統要録』造仏篇)。
- (16) 前掲註(13) 太田博太郎「重源と快慶」
- (17) 西川新次「七百九十年目の甦り—その尊容と平成修理の概要—」(東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会編「仁王像大修理」朝日新聞社、一九九七年五月)
- (18) 上横手雅敏・松島健・根立研介「運慶の挑戦」(文英堂、一九九九年七月) 五七頁
- (19) 但し、この四天王像の担当仏師を伝える最も古い資料である醍醐寺蔵の弘安七年(一一八四)大仏殿図では持国天像を運慶、增長天像を康慶としていることを重視する見方もある。(前掲註(7) 根立研介「日本中世の仏師と社会」一八八頁)
- (20) 松島健「東大寺仁王像修理について」(『月刊文化財』三二八、一九九〇年三月)
- 同「東大寺南大門金剛力士像(吽形) 像内資料」(『南都佛教』六四、一九九〇年六月)
- 同「東大寺南大門金剛力士像(阿形) 像内資料」(『南都佛教』六七、一九九二年二月)
- 同「そして一本の檜材に—寄木造り彫刻の構造と技法—」(東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会編「仁王像大修理」朝日新聞社、一九九七年五月)
- (21) 前掲註(20) 松島健「東大寺南大門金剛力士像(阿形) 像内資料」
- (22) 田邊三郎助「東大寺南大門金剛力士像の作者」(『三浦古文化』五〇、一九九二年七月、同「田邊三郎助彫刻史論集」中央公論美術出版、二〇〇一年五月、所収)
- (23) 麻木脩平「東大寺南大門金剛力士像の制作分担について」(『南都佛教』七二、一九九五年一月)
- (24) 前掲註(17) 西川新次「七百九十年目の甦り」
- (25) 西川杏太郎「運慶と快慶—作者の謎とその造形—」(東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会編「仁王像大修理」朝日新聞社、一九九七年五月、同「日本彫刻史論叢」中央公論美術出版、二〇〇一年一月、所収)
- (26) 田邊三郎助「仏師運慶について—東大寺南大門二王像を中心に—」(『武蔵野美術』一〇七、一九九八年一月、前掲「田邊三郎助彫刻史論集」所収)
- (27) 水野敬三郎「東大寺 金剛力士像」(『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記 篇二』中央公論美術出版、二〇〇四年二月)
- (28) 三宅久雄「日本の美術四五九 鎌倉時代の彫刻—仏と人のあいだ—」(至文堂、二〇〇四年八月)
- (29) 前掲註(20) 松島健「そして一本の檜材に」
- (30) 松島健「鎌倉彫刻—慶派仏師を中心に—」(『原色日本の美術九 中世寺院と鎌倉彫刻』小学館、一九九四年四月)
- (31) 『東宝記』第一講堂條、「東寺講堂御佛所被籠御舍利員数」。

なお、系図に見える運覚を「高山寺縁起」に円慶が改名したと伝える仏師に当たるとすると、この円慶は寿永二年（一一八三）の運慶願経に見える。

(32) 堀池春峰「重源上人と南大門仁王像の造頭」〔南都仏教〕六五、一九九一年三月

(33) 田邊三郎助氏は慶派工房内に絵仏師的役割を担った小仏師の存在の可能性を指摘されている。(前掲註(22)「東大寺南大門金剛力士像の作者」)

(34) 前掲註(13) 太田博太郎「重源と快慶」

(35) 前掲註(3) 毛利久「仏師快慶論」一一九〜一二二頁

(36) 水野敬三郎「快慶作品の検討」〔美術史〕四七、一九六三年一月、同「日本彫刻史研究」中央公論美術出版、一九九六年一月、所収

(37) 水野敬三郎「宋代美術と鎌倉彫刻」〔国華〕一〇〇〇、一九七七年五月、前掲「日本彫刻史研究」所収

(38) 前掲註(30) 松島健「鎌倉彫刻―慶派仏師を中心に―」

(39) 前掲註(23) 麻木脩平「東大寺南大門金剛力士像の制作分担について」

(40) 前掲註(17) 西川新次「七百九十年目の甦り」

史料1. 南中門二天造立 東大寺統要録造仏篇
建久五年十二月廿六日南中門二天造始之

東方 多聞天

西方 持國天

二鉢共木像住古二丈也今度増三尺仍二丈三尺也

東方天

大佛師 快慶

小佛師十四人

良公 慶實 慶仁 仁慶

、、 良清 命猷 良快

行智 猷玄 慶清 快尊

定秀 慶覺

西方天

大佛師定覺

小佛師十三人

雲慶 行賢 尊珍 聖慶

慶範 良尊 盛長 尋慶

行俊

東方天 繪佛師廿九人

大佛師有尊

小佛師十五人

有尊 西觀 淨尊 西賢

良尊 淨、 覺尊 覺禪

圓雲、廣 有慶 良禪

有心 來西 有賢

西方天

大佛師定順

小佛師十三人

實祐

忠尊

定圓

良眞

良慶

良賢

明經

祐慶

緣覺

勝圓

淨圓

佛念

定勝

寺家繪佛師十二人

大佛師勢順

小佛師十一人

慶仁

善長

慶深

信智

善與

幸玄

教順

幸俊

經玄 定慶

慶圓

塗師卅二人内

東方天

大工宗包

小工十一人

西方天

大工、

小工九人

史料2・大仏殿兩脇侍造立 東大寺統要録造仏篇

一建久七年六月十八日 勅使并爲 御衣木加持・僧綱等下向即理性院律師宗嚴加

持御衣木

同八年六月十八日始奉_レ造 左右脇土觀音虚空藏像觀音像坐像二臂如意輪_レ坐_下

在_レ八天像

願主左衛門尉藤原朝綱入道宇津宮

大佛師法橋定覺

丹波講師快慶

各作半身後合一軀

虚空藏像同坐像

願主掃部頭藤原親能造_レ之

大佛師法橋康慶

同 運慶

是父子也各作_レ半身_レ合爲_レ一軀

已上大佛師四人

小佛師八十人

番匠八十人 杣人八十人

史料3・大仏殿四天王造立 東大寺統要録造仏篇

建久六年八月 日始奉_レ造_レ四天王像

東方天持國

大佛師法眼運慶

小佛師

南方天增長

大佛師法眼康慶

小佛師

北方天多聞

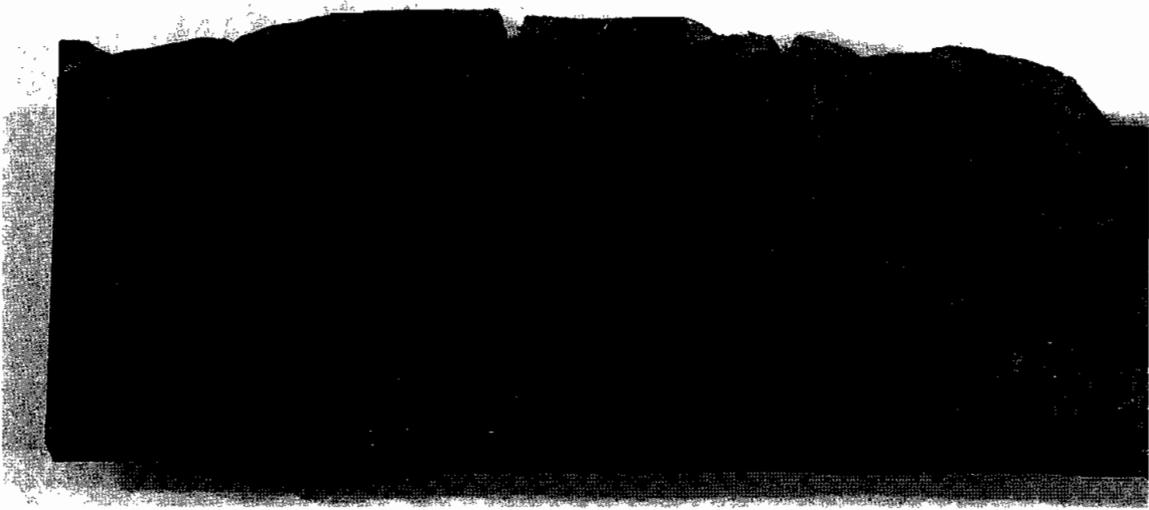
大佛師法橋定覺

小佛師

西方天廣目

大佛師丹波講師快慶

小佛師



一切如来心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經

於南大 建仁三年八月八日書寫門東脇午時之許書寫之
(消線アリ) 願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道 執筆惠阿弥陀仏

造東大寺大勸進大和尚南无阿弥陀佛 聖阿弥陀仏

大佛師 定覺 覺円 定勝 定円 定尊 國光 正宗 國成 國永 秋友
湛慶 小仏師 源慶 慶仁 春慶 明尊 信勝 國定 國貞 行友 貞友
長順 慶寛

甲阿弥陀仏 順阿弥陀仏 禪阿弥陀仏 真阿弥陀仏 来阿弥陀仏 西阿弥陀仏 乙阿弥陀仏 增忍
惠阿弥陀仏 住阿弥陀仏 禪阿弥陀仏 蓮阿弥陀仏 專阿弥陀仏 生阿弥陀仏 西案 小阿弥陀仏
小法師 原 取勝

(以下略)

史料6. 南大門仁王像(阿形) 像内納入宝篋印陀羅尼經奥書

(第十五紙)

一切如来心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經

建仁三年 歲次 癸亥 八月七日書了執筆沙門淨阿弥陀佛

一交了

光明真言

(梵字三行)

勸進造東大寺大和尚南无阿弥陀佛

甲阿弥陀佛 重阿弥陀佛 惠阿弥陀佛 釋阿弥陀佛

真阿弥陀佛 蓮阿弥陀佛 来阿弥陀佛 千阿弥陀佛

禪阿弥陀佛 順阿弥陀佛 已上十八佛所行事

(以下略)